

エフェソの信徒への手紙1章1節～2節 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

エフェソの信徒への手紙は「手紙」の形式を取っている。従って、手紙の送り手と受け手と祝福の言葉の三つが明記されている。送り手は「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから」と、キリストの使徒であることを何よりの誇りにしていた「パウロ」となっている。しかし、本文を読んでみると、パウロの書いたものとは思えない。パウロがキリストについて語る時には、キリストの人格と触れ合っているように、生々しく述べているからである。例えば、Iコリント15章で、復活したキリストを力強く論じているが、「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました（Iコリント15:8）」と、復活のキリストに出会ったと書いている。また、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです（ガラテヤ2:20）」と、キリストが自分の内に生きていると書いている。キリストは遠い存在ではなく、近くで、自分を生かし支える親しい存在として捉えている。ところが、エフェソ書では、キリストは全てに勝利し、神の右に座し、栄光に輝くキリストとして描かれている。更に、パウロの手紙は、教会で起こった具体的な問題に、愛と怒りを込めて福音的に正そうとして書かれ、パウロの肉声が伝わって来るが、エフェソ書の信仰的勧めは、神に愛された者として、世の乱れた、ふしだらな人々のようではなく、キリストの愛に倣い、人々の模範となるように、との勧めの言葉が多い。エフェソ書はパウロが書いたものではなく、パウロの名を借りて、誰かが書いたものである。著者は特定できないが、教会において指導的な立場にあった人であることは確かである。

手紙の受け手、宛先は、「エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ」となっている。しかし、原著の手紙には「エフェソ」という宛先はなく、空欄ではなかったかとも言われている。エフェソは、現在のトルコの西の端の、エーゲ海に面した所で、当時、小アジアと言われた地方の首都であった。現在も大遺跡群が残され、大きな都市であったことが分かる。パウロは第三宣教旅行で、コリントからエフェソに来て、最も長い3年の期間も滞在して、宣教をし、エフェソだけでなく、近隣の町々に弟子たちを遣わし、強力な宣教活動を展開している。パウロの宣教において、最も充実した時ではなかったかと思える。従って、エフェソを宛先にしても、この手紙は、一つの教会宛てではなく、エフェソを中心にした諸教会に宛てて書かれた手紙と理解されている。それぞれの教会の礼拝で読み上げられ、信徒たちが、自分たちはいかに神の豊かな恵みの中に置かれているかを喜び、キリスト者として、信仰の証しに生きるようにと励ます意図で書かれた手紙であると、現在は理解されている。

祝福は、「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」で、父なる神と主イエス・キリストからの恵みと平和を求める祈りである。恵みとは一方的な恩寵で、平和とは共にあることである。